

『マクベス』における闇：二つの殺人と観客の視点

Darkness in *Macbeth*: Two Murders and the Audience's Points of View

鵜澤 文子

(1) グローブ座の「暗闇」

王殺しを逡巡していたマクベスは具体的な殺害方法を語るマクベス夫人の言葉に促されて、ついにダンカン王殺害を決意する。その直後、第二幕冒頭ではすでに真夜中を過ぎてあたりは暗闇に包まれていることが告げられる。

BANQUO How goes the night, boy?

FLEANCE The moon is down; I have not heard the clock.

BANQUO And she goes down at twelve.

FLEANCE I take't, 'tis later, sir.
(2.1.1-3)¹

「夜」についての言及は第一幕五場から目立ってくるが、王殺しの決意と実行の間に当たるこの場で、バンクォー親子の会話によって舞台上に「夜」が持ち込まれる。バンクォーの血筋に対するマクベスの不安や嫉妬を考えれば、さらなる殺人を暗示する闇であると言えるだろう。舞台上には“This night's great business” (1.5.66) というマクベス夫人の言葉を裏付けるように、王殺しの実行に相応しい暗闇が設定されたことになる。

『マクベス』の執筆は1606年頃と推測される。「闇」が示唆される場面の多い作品であるが、当時のシェイクスピアの劇団国王一座の本拠地はグローブ座であったため、屋外劇場で昼の時間帯に上演されていたということになる。昼間とは言っても、屋外劇場の舞台に差し込む光の量は通常の屋外の明るさから想像されるよりは少なかったであろう。舞台は南西の方

角に置かれていたと考えられており、² また、季節や時間帯によっては舞台だけでなく平土間全体も劇場の外壁等の影に入ったと考えられるからである。³ それでもグローブ座の舞台は芝居の上演中は一定の光の量をむらなく受けており、その光を遮って舞台上に実際の暗闇を作り出すのは不可能であった。台詞や小道具などがきっかけとなって観客の想像の中に「暗闇」が生み出され、それを前提に芝居は進められたのである。

医師であり占星術師であったサイモン・フォーマン (Simon Forman) が1611年4月20日付けのグローブ座での『マクベス』の観劇記録を残している。⁴ シェイクスピアと同時代の『マクベス』上演に関して残された唯一の記述であるが、500語ほどの文章の中に‘night’が五回使われている。ダンカン王殺害の場 (第二幕一場～二場) に関する部分に三回、殺害されたバンクォーの亡霊が現れる晩餐の場 (第三幕四場) とマクベス夫人の夢遊病の場 (第五幕一場) に関する部分にそれぞれ一回ずつの記述がある。ダンカン王殺害の場と、バンクォーの殺害から続く晩餐の場では台詞と小道具の松明が持ち込まれることで「夜」が設定される。夢遊病の場でマクベス夫人が蠟燭 (taper) を持って登場するのはそれが室内の場であることを示すためだと思われるが、昼の光の下にあるグローブ座の舞台に照明用の小道具が持ち込まれることで、観客が見ている舞台に「暗闇」が設定されたということが分かる。⁵

フォーマンが「夜」との関連で言及した三つの場面のうち、ダンカン王殺害は第二幕という早い段階で迎える作品のクライマックスであり、マクベスの転落が始まる重要な場である。観客はマクベスとマクベ

ス夫人が周囲を欺き、共謀して王殺しの大罪を犯したという秘密を共有する。舞台上に暗闇を作り出すことが不可能だった時代の観劇記録に「夜」の場面であると記されているということは、この場面の上演において「暗闇」であることが観る側にとって印象に残る設定であったということであろう。『マクベス』の「暗闇」は観客の作品受容においてどのような意味を持ち、どのように機能しているのだろうか。「暗闇」の中で実行される二つの殺人——ダンカン王殺害とバンクォー殺害——を中心に考えてみたい。

(2) 闇の中の恐怖

冒頭で引用したように、第二幕の舞台には王殺しに相応しい「暗闇」が設定される。ところがダンカン王は舞台上では殺害されない。観客はマクベスとマクベス夫人のやり取りから王殺害の様子を知ることになる。第二幕二場はダンカン王殺害の実行を観客に知らせる重要な場面であるのだが、それを伝えるマクベス夫妻の会話は微妙に噛み合わないものとなっている。二場の冒頭、ひとりで登場したマクベス夫人が8行ほどの台詞を言ったところに、殺害を実行した(と思われる)マクベスが入ってくる。夫人がマクベスの存在に気付くのはそのままさらに5行ほどの台詞を続けた後、13行目の“My husband?”になる。

Enter MACBETH [with two bloody daggers]

MACBETH Who's there? What ho?

LADY MACBETH Alack, I am afraid they
 have awaked,

And 'tis not done; th'attempt and not the deed
Confound us. Hark! I laid their daggers ready,
He could not miss 'em. Had he not resembled
My father as he slept, I had done't. *My husband?*

MACBETH I have done the deed. Didst thou
 not hear a noise?

LADY MACBETH I heard the owl scream and
 the crickets cry.

Did not you speak?

MACBETH When?

LADY MACBETH Now.

MACBETH As I descended?

LADY MACBETH Ay.

MACBETH Hark, who lies i'th'second chamber?

LADY MACBETH Donaldbain.

MACBETH This is a sorry sight.

LADY MACBETH A foolish thought, to say a
 sorry sight.

(2.2.8-24, emphasis added)

昼間の屋外劇場での上演を念頭に置けば、夫の声を聞いてからその存在に気付くまでのこうした「間」は、舞台が闇に包まれていることを再度観客に印象付けるために必要だったのかもしれない。確かにそのような効果もあっただろうが、荒野の場面である第一幕三場では、バンクォーが出会うのを予期していない魔女の存在に気付くのに1行半ほどしか掛かっていない。そう考えると、殺害を実行した夫が戻ってくるのを前提とした流れの中では、この「間」は長く少々ごちない印象を与える。

さらに、後に続く二人の台詞には疑問文が多く、答えがないままのものもある。マクベスは“I have done the deed” (14) とダンカン王を殺害したことを夫人に告げるものの、王をどのように殺害したのかについては何も語らない。あるいは語ることができない。マクベスが殺害の状況を伝えようとする台詞のいったいどの時点でダンカン王は殺されたのだろうか。“God Bless us” や “Amen” (2.2.29) という声を聞いたのは殺害の前だったのか、後だったのか。そもそもその声の主は誰なのか。⁶ “Sleep no more: / Macbeth does murder sleep” (2.2.38-39) と聞こえたのはまさに王を殺害しようとした時だったのか。時制の異なる “Glamis hath murdered sleep” (2.2.45) はどうなのか。

ダンカン王殺害は「暗闇」が設定された舞台のさらにその奥で起きた出来事として、殺害の実行者の視点から伝えられる。重要なのは王殺しという行為そのものよりも、そうした行為が生み出す緊張感がどのように語られ、観客に伝えられるのかということである。ダンカン王を殺害した直後のマクベスは、夜が明

けた後に王の遺体の様子を比喩を使って滔々と述べる時(2.3.104-9)に見せる冷静さは持ち合わせていない。答えの出ない問い掛けや途切れ途切れの台詞、前後のはっきりしない説明が繰り返されることで、大罪を犯したマクベスの動揺や混乱が「暗闇」の中に透けて見えてくる。こうした「暗闇」の中の混乱は恐怖の感覚を生み出すことになる。⁷ ダンカン王殺しを見せずに、且つそれが伝えられる場を「暗闇」に設定することで、はっきりした状況が分からないことから来る混乱が強調され、観客はマクベス夫妻を襲う恐怖をより強く共有するのである。

この場では「暗闇」の中を見ているという観客の意識を利用して、視覚的効果と聴覚的効果に焦点が当てられている。まず、実際には「暗闇」の中が見えているという逆説的な状況の中、血に染まったマクベスの手と短剣がダンカン王殺害の完遂を視覚的に訴える。マクベスは殺害に向かう直前に刻々と形を変えていく短剣の幻影を見るが、ダンカン王の殺害を実行することで血糊の付いた短剣が現実のものになって観客の目の前にあるということになる。

加えて、この場面にはさまざまな音が伴われている。マクベスが王の殺害へ向かうきっかけを与えたのは夫人が鳴らす鐘の音であり、マクベス夫人は夫の帰りを待ちながら不吉な死を知らせる梟の鳴き声を耳にする。鐘の音も梟の声も現実聞こえてきた音である。⁸ 観客がマクベス夫妻と共有する現実の音が舞台上の緊迫感を高める一方で、マクベスは王殺害から戻って以降、屋敷中に響き渡る“Sleep no more”という叫び声に怯えている。この声はマクベス夫人にも、観客にも聞こえない。マクベスの台詞の中のみ存在する言葉であり、彼自身の声で語られる幻聴である。実際に舞台で台詞を聴いていると、マクベスの台詞のどの部分が幻聴なのか、彼自身の言葉との境目も曖昧である。「暗闇」の中で幻影と幻聴が舞台上の現実と交錯するのに合わせて、観客はマクベスと同じ恐怖に取り込まれていく。

殺害されたダンカン王を最初に「発見」するのはマクダフであるが、彼がまず訴えたのは言葉ではない表せない恐怖である“O horror, horror, horror, / Tongue nor heart cannot conceive, nor name thee”

(2.3.56-57)。これは「暗闇」の中で観客が感じていた恐怖を表象するものである。王殺しは見せずに、殺害についての詳しい報告はなされず曖昧なまま、「暗闇」の中の混乱とそれを見ている観客の視覚や聴覚を利用することによって恐怖が生み出される。そして、こうした恐怖を観客と共有するマクダフもまた、ダンカン王殺害について語ろうとしない。

MACBETH What is't you say, the life?

LENNOX Mean you his majesty?

MACDUFF Approach the chamber and destroy
your sight

With a new Gorgon. Do not bid me speak:

See and then speak yourselves.

(2.3.63-67)

「暗闇」が設定された舞台には、見れば目が潰れるかもしれないほどの恐怖の光景が生み出されている。それは殺害の実行者であるマクベスにも、共謀者のマクベス夫人にも、遺体の発見者であるマクダフにも語ることができない。門扉を叩く音で夜が明けたことが告げられ、マクダフが皆の前でダンカン王が殺害されたと明らかにしたときに初めて、現場の様子がレノックスによって伝えられる。

MACDUFF Your royal father's murdered.

MALCOLM O, by whom?

LENNOX Those of his chamber, as it seemed,
had done't.

Their hands and faces were all badged with
blood,

So were their daggers which, unwiped, we found
Upon their pillows. They stared and were
distracted;

No man's life was to be trusted with them.

(2.3.93-98)

しかしレノックスの報告は、血に塗れた殺害現場の様子を伝えるものの、マクベス夫妻の計画通りに部屋付きの従者に罪を着せたものである。ダンカン王

be master of his time / Till seven at night” (3.1.42-43) 等、具体的な時間についての言及が多い。こうした台詞によって舞台上に「暗闇」——時間帯としての「夜」と秩序崩壊を象徴する「闇」——が設定されるのに合わせて、晩餐会が始まるまでの限られた時間を使ってマクベスが首尾よくバンクォーの殺害をやったのける様子が明らかになる。

このようにバンクォーの殺害はその綿密な計画をもって事前に観客に知らされ、舞台上で滞りなく実行される。¹⁰ さらに殺害実行のすぐ後にはその様子が具体的に報告される。同じく「暗闇」が設定された中で行われたダンカン王殺害では、マクベスは実行するのを躊躇い続け、殺害の状況も曖昧なままだったのとは対照的である。第三幕三場で殺害が実行されると、晩餐会を催しているマクベスのもとへ顔に血が付いたままの暗殺者が訪れて、バンクォーの「喉を掻っ切った」“My lord, his throat is cut; that I did for him” (3.4.16) ことが伝えられる。そして殺害現場に残されたままのバンクォーの遺体について報告される。

..... [Banquo's] safe in a ditch he bides,
With twenty trenched gashes on his head,
The least a death to nature.

(3.4.26-28)

観客が舞台上で目撃した殺害の場面にその実行者によって言葉が与えられ、「暗闇」の中で頭部に多数の傷を負ってどぼの中に倒れているバンクォーの姿が浮かび上がってくる。

バンクォー殺害に見られる殺害の予告(第三幕一場)、舞台上での実行(第三幕三場)、そして殺害状況の報告(第三幕四場)という途切れのない一連の流れは、マクベスが企てる次の殺人——マクダフの妻と息子の殺害——でも同じである。親子の殺害が実行されるのは第四幕二場であるが、その直前にマクベスはマクダフがイングランドへ逃亡したとの知らせを受け、ファイフにあるマクダフの城を襲って家の者を皆殺しにすると宣言する。

The castle of Macduff I will surprise;

Seize upon Fife; give to th'edge o'th'sword
His wife, his babes, and all unfortunate souls
That trace him in his line. No boasting like a
fool;
This deed I'll do before this purpose cool....
(4.1.149-53)

直ちに殺害を実行に移す決意が強調されるのを受けて、第四幕二場はファイフの城にいるマクダフ夫人とロス会話で始まる。30行ほどでロスが退場した後、暗殺者が現れてマクベスの予告通りにマクダフの妻と息子は惨殺される。続く第四幕三場でそのことをイングランドにいるマクダフに報告するのは、前場冒頭でファイフの城にいたロスである。

ROSS Your castle is surprised; your wife and babes
Savagely slaughtered. To relate the manner
Were on the quarry of these murdered deer
To add the death of you.
(4.3.206-9)

ファイフにいたロスが次の場で即座にイングランドへ移動していることを不自然に思う観客はいないであろう。むしろ場面が切り替わっても連続して登場するロスの存在と、彼が報告するマクダフの城の惨状が先に引用したマクベスの殺害予告(4.1.149-53)を裏書きしたものであることによって、観客は王位を死守しようとするマクベスの計画が滞りなく進んでいることを認識することになる。バンクォーの殺害が晩餐会の始まるまでの限られた時間の中で首尾よく実行されたのと同じ効果があるだろう。これら二つの殺人を主導するのは紛れもなくマクベスであり、もはや共謀者としてのマクベス夫人を必要とすることもない。マクダフの妻子の殺害は「暗闇」の中で行われるものではないが、バンクォー殺害の場合と同じく、観客はマクベスの計画通りに殺人が遂行されるのを目撃し、さらにそれが報告される場にも居合わせる。その結果、観客は舞台上のどの人物よりも、すなわちダンカン王殺害の共謀者であったマクベス夫人よりも、マクベスに近い視点を獲得することになるのである。

第三幕四場の晩餐の場でも観客の視点はマクベスに近い位置にある。この場に特徴的なのは、マクベスに見えているバンクォーの亡霊がマクベス夫人も含めた他の登場人物には見えず、観客だけに見えているということである。

ROSS His [Banquo's] absence, sir,
Lays blame upon his promise. Please't your
highness

To grace us with your royal company?

MACBETH The table's full.

LENNOX Here is a place reserved, sir.

MACBETH Where?

LENNOX Here, my good lord. What is't that
moves your highness?

MACBETH Which of you have done this?

LORDS What, my good lord?

MACBETH Thou canst not say I did it; never
shake

Thy gory locks at me!

(3.4.43-51)

マクベスにしか見えない亡霊の姿を介在させることによって、観客はマクベスと同じ視点を獲得することになる。さらに、王位にあるマクベスの座るべき場所に亡霊が着席しているというのは秩序の崩壊を示唆するものである。あるいはこの亡霊が血に塗れて殺害されたダンカン王を想起させるのならば、王殺しによる秩序崩壊を暗示するだろう。秩序の崩壊は第二幕四場で老人が語った天界の異変がもたらす暗闇へと繋がっている。そしてバンクォーは王家につながる血筋でありながら、「暗闇」の中で遺体となってどぶに放置されている。これもまた秩序の崩壊を示すものである。

(4) 闇の中の殺人と観客の視点

『マクベス』における二つの殺人——ダンカン王殺害とバンクォー殺害——が行われた「暗闇」は、観客の視点を操作するという意味において異なる機能を持つものである。ダンカン王殺害は舞台上では

行われない。殺害の場に設定された「暗闇」は真相を覆い隠し、そこで起きたことをすべて曖昧なままにしておくことで舞台上に恐怖を生み出した。「暗闇」の中に見えてくるのは王殺しという大罪を犯したマクベスの動揺や混乱であり、殺害の実行者であるマクベスを含め、誰もその恐怖の光景を言葉にして伝えることができない。観客は状況が曖昧であるがゆえの不安と恐怖をマクベス夫妻と共有することはできるが、真相を覆い隠す闇の中を見ることはできない。そのため観客の視点は「暗闇」の外側に置かれることになる。一方、バンクォー殺害は舞台上の「暗闇」の中で実行される。観客は殺害の計画の段階から実行に至るまでマクベスの企み通りに、滞りなく進められるのを舞台上で目撃する。そのため観客の視点は常に「暗闇」の内側に置かれて、マクベスと同じ視点を獲得することになる。舞台上の「暗闇」の中で行われていることが見えることによって、観客は殺害の予告、実行、そして報告という一連の流れをマクベスと共有していく。ダンカン王殺害の「暗闇」は真相を覆い隠すが、バンクォー殺害の「暗闇」はそこに隠された真相を明らかにするものなのである。

舞台上に実際の暗闇を演出できなかった時代に、シェイクスピアは闇を象徴的に用いながら「高潔なマクベス」「noble Macbeth」(1.2.67)と呼ばれた男が「殺人鬼」「this dead butcher」(5.9.36)に成り果てるさまを描き出した。残虐な殺人に次々と手を染めていくマクベスの転落に観客は魅きつけられ、時に同情さえ感じるのは、「暗闇」を用いることによって観客の視点が操作されていることと関係がある。劇作家はダンカン王殺害とバンクォー殺害の場面に設定された「暗闇」を利用して、観客の視点が闇の外側から内側に置かれるように巧みにコントロールしているのである。

ダンカン王殺害後、昼にもかかわらず大地を覆う闇は国王弑逆による秩序の崩壊を暗示するものであった。劇世界全体を象徴するこの闇は観客の視点を取り込むことにより、自らの地位を守るためにさらなる殺人を重ねるマクベスの内なる闇と重なっていく。敵陣に包囲される中、マクベス夫人の死が知らされ、続いてバーナムの森が動いたと報告されたとき、マ

クベスが抱くのは自らを覆う闇からはもう逃れられないという諦観である。「このまま逃げても、ここに留まっても、無駄だ」とマクベスは悟る。

There is nor flying hence nor tarrying here.
I 'gin to be aweary of the sun
And wish th'estate o'th'world were now undone.
Ring the alarum bell! Blow wind, come wrack;
At least we'll die with harness on our back.
(5.5.47-51)

「陽の光もうとましくなってきた。宇宙の秩序など崩れてしまえばいい」とマクベスが語る時、観客は舞台を覆う象徴的な闇の中にマクベスの諦観を共有する。そして、マクベスが最後の戦いに挑むにあたって認識したのは、自らを破滅に導く闇の存在であった。陽の光さえ拒否し、秩序の崩壊を願うマクベスの内なる闇を共有したとき、観客はマクベスの破滅がもたらす空虚なカタルシスをマクベスと同じ諦観をもって受け入れるのである。

注

¹ *Macbeth*からの引用はA. R. Braunmuller, ed., *The New Cambridge Shakespeare* (Cambridge, Cambridge UP: 1997) による。

² Wenzel HollarとJohn Nordenのバンクサイドのスケッチによれば、第一次、第二次クローブ座を初めとする屋外劇場の舞台は南西の方角に位置していたことが分かる。直射日光やロンドンに多い南西の風から役者や衣装など舞台上のあらゆるものを保護するためと考えられる。当時の衣装は高価なものであった。Graves, “Outdoor Stage Lighting” 240.

³ Graves, “Outdoor Stage Lighting” 238-42.

⁴ E. K. Chambers, *William Shakespeare: A Study of Facts and Problems*, vol. II, 337-38. フォーマンの記録には観劇日が1610年4月20日土曜日となっているが、曜日から推測して正しい日付は1611年4月20日であると考えられている。

⁵ 第五幕一場は屋内の場だが、時間的には夜であると考えられる。この場の最後の台詞は侍女の

“Good night, good doctor” (5.1.69) である。

⁶ 声の主が誰なのかについては様々な議論がある。“the second chamber”に寝ているマルカムとドナルベインだとする説、ドナルベインとその従者だとする説、あるいはダンカン王の部屋付きの従者二名だとする説がある。Cambridge版のA. R. Braunmullerはマルカムとドナルベインとしている。

⁷ D. J. Palmerはダンカン王殺害について以下のよう指摘している。

His murder is veiled from our eyes, although we are in a sense present while it is committed, sharing Lady Macbeth's awareness of what is taking place off-stage but close to hand. Instead of distancing the deed from us, therefore, the effect is to intensify its sacrilegious horror. (D. J. Palmer, “A new Gorgon? Visual Effects in *Macbeth*,” 67).

⁸ 鐘の音はマクベス自身が鳴らすように指示したものである(2.1.32)。また第二幕三場でレノックスはダンカン王が殺害された夜の様子について、梟が夜通し泣き続けていた “The obscure bird / Clamoured the livelong night” (2.3.51-52) と言っている。

⁹ “bloody stage”はダンカン王の殺害や、あるいは第一幕二場に登場した戦場で負傷した血塗れの将校をイメージさせるだろう。

¹⁰ バンクォー殺害の場面は以下のようになっている。観客の目には触れず、曖昧なところが多かったダンカン王の殺害とは異なり、直接的な暴力が瞬時にしてバンクォーの命を奪う様子が舞台上で演じられる。

Enter BANQUO and FLEANCE, with a torch
SECOND MURDERER A light, a light!
THIRD MURDERER 'Tis he.
FIRST MURDERER Stand to't.
BANQUO It will be rain tonight.
FIRST MURDERER Let it come down.
[The Murderers attack. First Murderer strikes out the light]
BANQUO O, treachery!

Fly, good Fleance, fly, fly, fly!
 Thou mayst revenge – O slave!
 [Dies. *Fleance escapes*]
 (3.3.15-21)

参考文献

- Adelman, Janet. *Suffocating Mothers: Fantasies of Maternal Origin in Shakespeare's Plays, Hamlet to The Tempest*. New York and London: Routledge, 1992.
- Barish, Jonas. "Shakespearean Violence: A Preliminary Survey." James Redmond, ed., *Violence in Drama*, Themes in Drama 13 (CUP, 1991): 101-21.
- Berger, Harry, Jr. *Making Trifles of Terrors: Redistributing Complicities in Shakespeare*. Ed. Peter Erickson. Stanford: Stanford UP, 1997.
- Biggins, Dennis. "Sexuality, Witchcraft, and Violence in *Macbeth*." *Shakespeare Studies* VII (1975): 255-77.
 <<http://connection.ebscohost.com/c/literary-criticism/7168012/>>
- Booth, Stephen. *King Lear, Macbeth, Indefinition, and Tragedy*. New Haven and London: Yale UP, 1983.
- Brown, John Russell. "Violence and Sensationalism in the Plays of Shakespeare and other Dramatists." *Proceedings of the British Academy* 87 (1995): 101-18.
- , ed. *Focus on Macbeth*. London: Routledge and Kegan Paul, 1982.
- Calderwood, James L. *If It Were Done: Macbeth and Tragic Action*. Amherst: U of Massachusetts P, 1986.
- Carroll, William C., ed. *Macbeth: Text and Context*. Boston and New York: Bedford / St. Martin's, 1999.
- Chambers, E. K. *William Shakespeare: A Study of Facts and Problems*. Vol.II. Oxford: Clarendon P, 1930.
- Cohen, Derek. *Shakespeare's Culture of Violence*. New York: St. Martin's Press, 1993.
- Diehl, Huston. "The Iconography of Violence in English Renaissance Tragedy." *Renaissance Drama*, New Series XI (1980): 27-44.
- Empson, William. *Essays on Shakespeare*. Ed. David B. Pirie. Cambridge: Cambridge UP, 1986.
- Everett, Barbara. *Young Hamlet: Essays on Shakespeare's Tragedies*. Oxford: Clarendon, 1989.
- Foakes, R. A. *Shakespeare and Violence*. Cambridge: Cambridge UP, 2003.
- Graves, R. B. "Shakespeare's Outdoor Stage Lighting." *Shakespeare Studies* 13 (1980): 235-50.
- . "Elizabethan Lighting Effects and the Conventions of Indoor and Outdoor Theatrical Illumination." *Renaissance Drama*, n.s.12 (1981): 51-69.
- Greenblatt, Stephen. "Shakespeare Bewitched." *Shakespeare and Cultural Traditions*. Eds. Tetsuo Kishi, Roger Pringle and Stanley Wells. Newark: U of Delaware P; London and Toronto: Associated UP, 1994.
- Holland, Peter, ed. *Shakespeare Survey 57: Macbeth and Afterlife*. Cambridge: Cambridge UP, 2004.
- Kinney, Arthur F. *Lies Like Truth: Shakespeare, Macbeth, and the Cultural Moment*. Detroit: Wayne State UP, 2001.
- McDonald, Russ, ed. *Shakespeare Reread: The Texts in New Contexts*. Ithaca and London: Cornell UP, 1994.
- . *Shakespeare's Late Style*. Cambridge: Cambridge UP, 2006.
- Shakespeare, William. *Macbeth*. Ed. Braunmuller, A. R. The New Cambridge Shakespeare. Cambridge: Cambridge UP, 1997.
- . *Macbeth*. Ed. Brooke, Nicholas. The Oxford Shakespeare. Oxford: Oxford UP, 1990.
- . *Macbeth*. Ed. Hunter, G. K. The New Penguin Shakespeare. Harmondsworth: Penguin Books, 1967.
- Sinfield, Alan. *Faultlines: Cultural Materialism and the Politics of Dissident Reading*. Berkeley: U of

California P, 1992.

Spurgeon, Caroline F. E. *Shakespeare's Imagery and What It Tells Us*. Cambridge, Cambridge UP, 1935.

Wells, Robin Headlam. *Shakespeare on Masculinity*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.